

資 料

大学体育実技ゴルフ授業における簡易スキルテスト
の再現性およびパフォーマンスとの関係

安部 孝

東京大学教養学部

Reliability of Golf Performance Test in University Students

Takashi ABE

Dept. of Sports Sciences, College of Arts and Sciences
The University of Tokyo.

緒 言

生涯スポーツとしてのゴルフは、テニスやスキー、水泳などとともに現在最も盛んに行われているスポーツのひとつである。また、高校や大学においては課外活動とは別に、一般体育の実技種目のひとつとしてゴルフを採用している所も数多くみれる。本東京大学では平成2年度より正課体育実技のスポーツ種目としてゴルフが採用され、定員40名の授業が第2学年を対象に開講されている。基本的な技術の学習は施設の関係上、通常のグラウンドにおいてプラスチック製穴あきボールを用いて実施している。基本技術の学習過程で学生が自己のスキル獲得度やスイング改善の課題を客観的に理解し、単純な動作の繰り返しによる技術学習を課題を持った意欲的な内容にするため、授業時間内にプラスチック製穴あきボールを用いた簡易スキルテストを実施している。この簡易スキルテストが学生のゴルフ・パフォーマンスと良好な関係にあること、また週1回のゴルフ授業によってスキルテストの得点が有意に向上することについてはすでに報告した^{1, 2)}

本研究では、現在ゴルフ授業の学習過程で利用している簡易スキルテストの再現性について検討するとともに、実際のゴルフ・パフォーマンスとの関係についても再度検討した。

方 法

1. 対象者

対象は木曜日2限および3限に正課体育実技の「ゴルフ」コースを履修した本学2年生80名(男子71名、女子9名)であった。体育実技「ゴルフ」コースの履修に際し学生には、「ゴルフ」は初心者指導が中心でありゴルフ未経験者を対象にすることを説明した。従って履修した学生の中にゴルフ経験者はいなかった。授業は平成4年4月16日に種目登録が行われ、4月23日から6月25日までの10週間を駒場キャンパス内のグラウンドを中心に授業を行い、ラウンド実習として木曜2限の学生は7月11日に、木曜3限の学生は7月12日に東京大学検見川総合運動場内のゴルフコースでラウンドレッスンを実施した。駒場キャンパス内での技術学習には主にプラスチック製穴あきボールを用い、一部アプローチショットおよびパターの学

Golf Skill Test

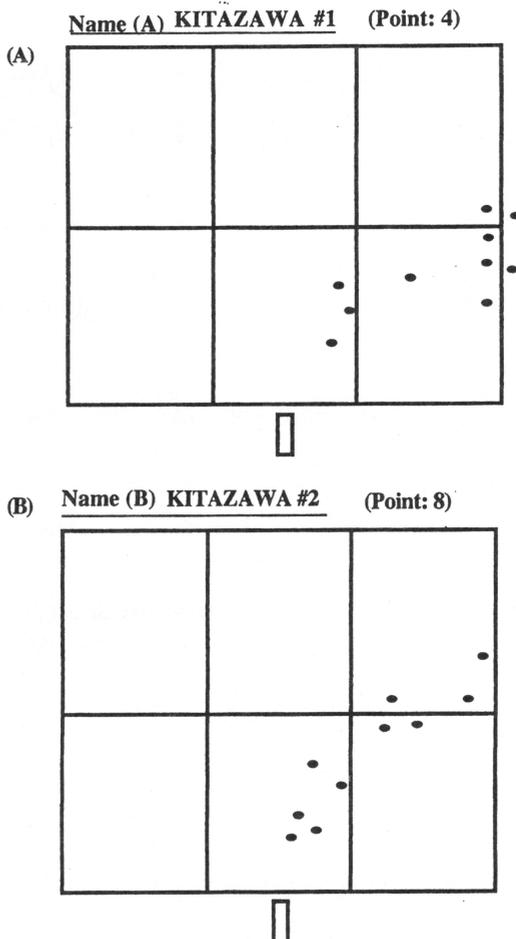


図1. 学生A君の簡易スキルテスト1回目と2回目の記入例

習時にもみ実際のラウンド用ゴルフボールを使用した。授業で実施した基本的な学習内容は前報²⁾に示した通りであった。

2. 簡易スキルテストとその再現性

スキルテストは打球の方向やその性質から各自のスイング動作を理解し、スキル改善につなげることを目的に行っている。具体的なスキルテストの方法については前報¹⁾に示した通りであるが、図1-3に示した記入例からも理解できるように打席から打った10球のボールが格子状のポイントのどの位置に落下したかを記録するものであった。

Golf Skill Test

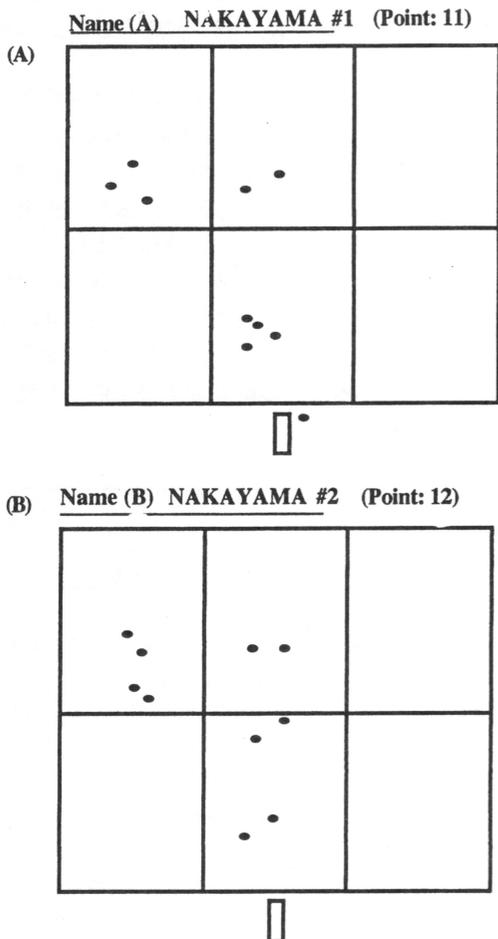


図2. 学生B君の簡易スキルテスト1回目と2回目の記入例

Golf Skill Test

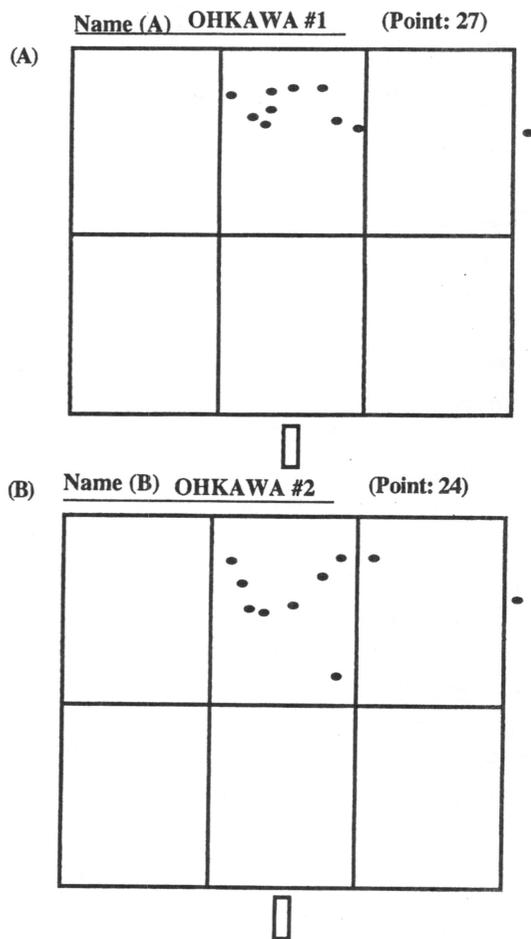


図3. 学生C君の簡易スキルテスト1回目と2回目の記入例

スキルテストは授業開始時および授業の1～2週おきに実施しているが、今学期は授業後半に雨天がつづき屋外での授業の不可能な日が多かったため授業6週目以降ではスキルテストを実施できなかった。簡易スキルテストの再現性についての調査は木曜日2限のクラス37名を対象に授業3週目に実施した。学生には調査の意義と必要性について説明し、従来のスキルテスト（連続10球）を交互に2回繰り返して行うように指示した。1回のテストに要する時間は約10分程であるため、2回のテストの間隔は約10～15分であった。使用クラブは9番アイアンとした。さらに、学習過程にお

けるスキルテスト得点の変化をみるため、授業開始時と授業5週目の得点を比較した。対象者は2回のテストを実施した68名であった。

3. ゴルフ・パフォーマンス

ラウンド実習として行っている検見川総合運動場ゴルフコースにおけるラウンドレッスンのスコアをゴルフ・パフォーマンスとして、スキルテスト得点との関係を検討した。コースはショートホール（パー3）が3コース、ミドルホール（パー4）が4コースからなる7ホール、パー25のコースである。学生は各4名のグループで10班に分

かれ、各班にはゴルフ経験の豊富な指導者が1名同伴し指導にあたった。指導者は円滑でしかも安全にプレーするための諸注意はもとよりルールやマナーについての指導も並行して行った。各班の指導者は同伴学生のスコアを各ホールごとにチェックし、ストローク数を資料として提出した。

結果と考察

図1～図3には、簡易スキルテストを2回繰り返し行って行った時の実際の入力例を示した。図1の学生A(KITAZAWA)ではスライス系の打球跡がみられ、1回目の得点が4点、2回目の得点が8点であった。逆に図2の学生B(NAKAYAMA)では2回のテストともにフックボールの打球跡が時々認められ、得点はそれぞれ11点と12点であった。高得点を取得した学生C(OHKAWA)ではほとんどのボールが打席前方の枠内にあり、安定した打球跡を残している。対象となった37名のテスト1回目とテスト2回目の平均得点はそれぞれ 13.6 ± 5.4 点、 13.8 ± 4.7 点であり、両平均値間に有意な差($p > 0.05$)は認められなかった。図4は2回繰り返しスキルテストを行った時の両者の相関関係を示したものである。2回のテスト間には $r = 0.74$ ($p < 0.01$)の比較的高い相関係数が認められた。また、1回目と2回目のスキルテスト得点の差は平均で 2.7 ± 2.5 点(範囲0～10点)であった。本スキルテストの再現性は簡易フィールドテストとしては比較的良好な結果であり、ゴルフ初心者学生が打球の方向やその性質(スライスやフックなど)を理解するには充分に利用可能であると考えられる。しかし、わずかな

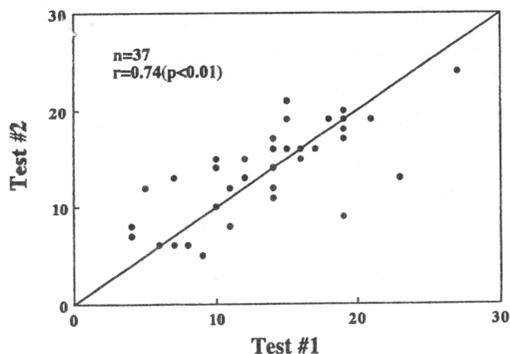


図4. 簡易スキルテストの1回目と2回目の関係

ケースではあるが、2回の得点差が5点以上あった例が37名中5名あり、得点としての信頼性を高めるためにはテストを繰り返し実施することが望ましいと思われる。

今回の授業開始時におけるスキルテスト得点の平均値は 11.7 ± 4.6 であった。昨年²⁾同様の方法で実施した授業開始時の平均得点は 11.6 ± 5.1 であり、ほとんど同じ値が得られた。また、授業5週目におけるスキルテスト得点は 15.5 ± 5.7 であり、授業開始時の得点に比較して有意($p < 0.01$)に増加した。初心者を対象にした週1回のゴルフ授業がゴルフのスキル向上につながることはすでに報告したが、本研究の結果も先の報告²⁾を支持する結果であった。

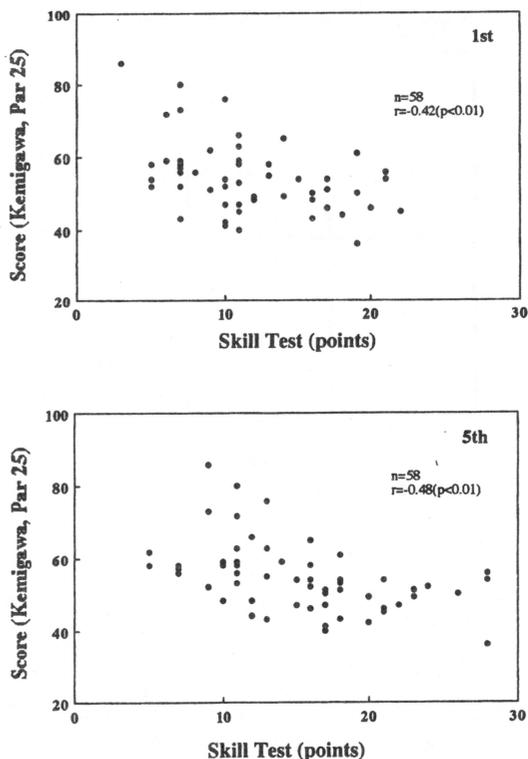


図5. 簡易スキルテスト得点と検見川7ホール・スコアとの関係

図5には授業開始時と授業5週目のスキルテスト得点と7ホールのラウンドスコアとの関係を示した。両者には有意な負の相関関係が認められ、スキルテストの得点が高い者ほど実際のラウンド

スコアは少ないことが示された。スキルテスト得点とゴルフ・パフォーマンスとの関係については前報^{1,2)}で報告したが、今回の結果も同様の関係が観察され、本研究で用いた簡易スキルテストは初心者学生のゴルフ・パフォーマンスを評価する有効な方法のひとつであると考えられた。前報²⁾でも同様の結果が認められたが、ゴルフ初心者とはいえ授業開始時のスキルテストの得点には相当な開きがみられ、すでに授業開始時の得点と最終のラウンドスコアとの間に有意な相関関係が観察された(図5)。初心者指導が中心である現在の授業では、履修者40名が基本的に同じ内容の課題を段階的に学習しているのが現状である。しかし、スキルテストの得点には授業開始時から大きな差が観察され、これがゴルフ・パフォーマンスを反映しているとすれば、初期のテスト結果を利用して各課題ごとのグループをつくり、スイング改善の学習を進めていくことも可能であろう。今後は学習内容の再検討や各課題ごとのグループ指導といった点についてさらに有効な学習内容を検討する必要がある。

謝 辞

本研究を実施するにあたり、本学の福永哲夫先生、石川旦先生、渡会公治先生、川原貴先生、佐野裕司先生、松尾彰文先生、船渡和男先生、川上泰雄先生、杉田正明先生、新名謙二先生、久野譜也先生、東海大学の古谷壽邦先生、明治生命体力医学研究所の江橋博先生、体協スポーツ医科学研究所の伊藤静夫先生、お茶の水女子大学の杉山進先生、日本女子大学の池川繁樹先生にはラウンド実習において多大の御協力を頂きました。ここに感謝いたします。

参考文献

1. 安部孝：大学体育実技ゴルフ授業における簡易スキルテストの試案，東京大学教養学部体育学紀要，26:85-88,1992。
2. 安部孝，福永哲夫：大学体育実技ゴルフ授業におけるスイング技術の改善，ゴルフの科学，6:37-40,1992。